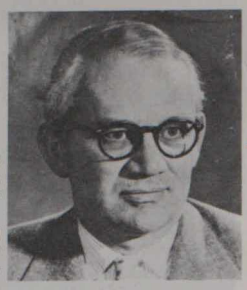
ジョージ・ウッドコック
――カナダのアナーキスト――

ヘンリー・V・ネリス


ウッド・コック

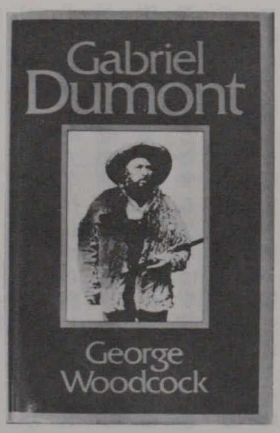
アナーキズムに関する記事は、一般にあまり歓迎されない。事実、アナーキズムという言葉自体、混沌、つまり無秩序ないしは暴動の可能性をはらんだ混乱と同一視されてきた。もっと不吉なところでは、無意味な暴力、ニヒリズム、テロリズムと同じに見られてきた。いわゆるアナーキストとはファナティックな、爆弾狂の暗殺者のように一般には思われている。今年六十六歳になるカナダのエッセイスト・詩人・批評家・編集者・放送者・世界旅行家・歴史家・政治思想家ジョージ・ウッドコックは、失われた重要な運動に関するこのようにグロテスクで戯画化された根強いイメージを正そうとして、その一生を捧げ、これまでに四十冊をこえる本を世に送ってきた。

見るからに優しそうな、眼鏡をかけた大学の学監を思わせる風貌のウッドコックは、アナーキズムの歴史と理論にかけては当代一の権威である。彼はまた、カナダの最も刺激的な作家であり、かつ最も多作の作家であることも疑いを入れない。彼は、多くの人が一生かかって読む本の数よりも、もっと多くの本を書く。この国の文学雑誌に彼の書いた記事や評論が載っていない時はなかったくらいだ。本格的な伝記、エッセイ集、文学作品集、旅行記、遠大な歴史研究など、年に一冊――ときには二冊――の割で出版している。これらの他に、彼が二十年前に創刊した季刊誌「カナダ文学」の編集もずっと続けている。ウッドコックの多作ぶりにはただただ驚くばかりで、その知性の範囲と経験の広さは、他に例を見ない。

ウッドコックは一九一二年、ウィニペグで英国人の移民の子として生まれた。長じてから勉学のためイギリスに渡り、しばらくは大学にも通った。だがいかにも個人主義者らしく、自分を教育し鍛えたのは前衛的な文学サークルへの参加によってであり、一九三〇年代後半の急進的な政治を通してであったようだ。第二次大戦中も、彼は活発でとらわれない思考の雑誌「NOW」を編集して、反戦主義を貫いた。「NOW」は七年間続き、英国のアナーキズムの中心的存在になった。戦後の英国社会では落ち着かず、居心地が悪くなったウッドコックは、一九四九年に再びカナダに戻ってきた。その時以来、バンクーバーを本拠地と定め、ここから世界各地に出かけていったり、ここで多くの著作を書き、時には教壇にも立った。

ウッドコックが英国を去るときには、すでにかなりの文学的名声を得ていた。数冊の詩集と、エッセイ集「The Writer and Politics（作家と政治）」、イギリス王制復古時代の劇作家アフラ・ベン（著作活動で自活した史上最初の女性）の伝記、最初の偉大なインテリ・アナーキスト、ウィリアム・ゴドウィンの研究などが、すでに世に出ていた。カナダに来てからは、自由意志論者とアナーキストの思想史の研究をさらに続けた。他の仕事をするかたわら、彼はピエール・ジョセフ・プルードンやクロポトキン、オスカー・ワイルド、ガンジー、それに一九三〇年代からの友人ハーバート・リードとジョージ・オーウェルといった人々の伝記を書き上げた。中でも彼の業績の頂点に位置するのは、一九六二年に出版された「アナーキズム――自由意志論の思想と運動の歴史」であろう。この労作は今日でもなお、アナーキズムに関して英語で書かれた規範的文献になっている。最近の彼は、文明化の進展に抵抗して自分達の相互扶助主義や協同体社会の方に平和と同胞愛を求めようとした個人や団体、たとえば十八世紀ロシアの平和主義者ドゥカボー派とか一九世紀末の西部カナダに生きた反逆者の首領ガブリエル・デュモンのような人々に関心を向けている。

だからといってジョージ・ウッドコックは、文献をもとに書物を書き、自分の書斎に閉じこもるようなタイプの学者とは違う。有名な世界旅行家でもあり、ラテン・アメリカやインド、東南アジア、ミクロネシア、それにカナダ北部などの、はるか遠い悠久の伝統文化に深い関心を持つ人間である。十数冊ある旅行記の中で、彼が最も魅せられているのは、たとえばメキシコやインドの農村やクイーン・シャーロット島の部族社会といったような、旅の途上で彼が出逢った自給自足的、自律的な共同社会であった。彼が最も厳しく糾弾しているのは、近代化論者であり政府の計画立案者であり、とりわけ宣教師に対してである。「ヨーロッパ人でおそらくこれほどひどいことを行なった集団は他にないだろう。奴隷商人でさえ、これほどひどく土着文化を破壊はしなかった。近代西洋文明にはないすぐれた協同感と互助感をしばしばバックにもつ部族生活の経済的社会的パターンを、これほどまでに破壊しはしなかった。」――と彼は書いている。



彼の一般的な歴史研究の中においても、彼はアレキサンダー帝国の生気にあふれた多元主義を称賛し（「インドのギリシャ人」）、ジョージタウンやシンガポール、香港、上海で見られた自発的な共同社会組織を称賛した（「極東における英国人」）。カナダ史に関しても、広く世に評価されている「カナダとカナダ人」の中において、たとえ錯誤と悲劇の記録を振り返るときでも、ウッドコックは、連邦主義者の理想、多文化社会の理想を祝福している。ある人々にとっては、カナダが生き残っていくにはあまりにも分割されすぎ、組織的統一がない。しかしカナダのそうしたところこそ、ウッドコックが魅かれるところなのである。ウッドコックの眼には逆に、カナダがあまりにも権力主義的で、中央集権化され、官僚化されすぎる危険があると映る。反対に、この国の強い地域主義と連邦制度と多文化主義の中にこそ、希望のしるしを見るのである。「私はカナダが、今日、地球上のどの国にもまして、かつてのスイスの実験を今、革命的方法で行なうことのできる国だと信じている。かつてフラン